

「音の散歩道づくり」の学習経験における保育者のリフレクション

横山真理*

1. 研究の背景

1-1. 保育内容領域「表現」において幼児の表現活動を捉える枠組

保育内容5領域の1つである領域「表現」（これ以降、領域「表現」と略称）は、平成元年の「幼稚園教育要領」、同2年の「保育所保育指針」の改訂（これ以降、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」などの法令を、法令が改定された年に応じて「〇〇年改訂」と略称）において初めて位置付けられた保育内容の領域概念である。それ以前は「健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作」とされていた領域区分が、「健康、人間関係、環境、言葉、表現」に再構成された（民秋2008）。それは、言語や音楽リズムや絵画製作といった活動の専門分野から保育内容を考えるという枠組から、環境との関わりの中で感性の働きによって生まれる心の動きを外に表すという表現の本質から保育内容を考えるという枠組への大転換であった。その後の平成20年改訂では、「内容の取扱い」のところで、「他の幼児の表現に触れられるように配慮したりし、表現する過程を大切にす」という文言が使われ、さらに平成29年改訂では、「風の音や雨の音、身近にある素材や表現の仕方に親しんだり」という文言が追加されている。このように領域「表現」においては、他者との関わり合い、表現する過程、身近な環境に対して働く感性が、保育内容の観点として一層重視されるようになってきている。横山（2019）は、平成29年改訂において示された領域「表現」の内容を実際の保育実践に具現化していく際の要点を、1) 乳幼児期-学童期における発達の連続性、学びの連続性、2) 「幼児期において育みたい資質・能力」をどのように遊びを通した統合的な「表現」活動の中で育てていくかという観点、3) 幼児にとって身近な環境の中にある素材との出会いを通して、感じたり考えたり気付いたりする学びの経験、の3点に整理している。

以上に概観した法令上の領域「表現」の内容の動向をふまえ、改めて領域「表現」において幼児の表現活動を捉える基本的な枠組を、本稿では次のように捉え直し、概念図（図1）として示す。

- (1) 感性（環境の中にある具体的事象を身体感覚器官を使って知覚する働き）と表現（環境との関わりの中で生まれる心の動きを外に表す行為）を一对として捉える¹⁾。
- (2) 表現の基盤は、身近な環境との相互作用における感性の働きである。
- (3) 感性と表現は遊びの中で充実発展する。
- (4) 表現の結果に至る表現の過程を重視する。
- (5) 感性と表現は他者との関わりの中で生まれ発展する。
- (6) 乳幼児期から学童期に至る発達の連続性に、感性と表現の論理を捉える。

* 東海学園大学教育学部 講師

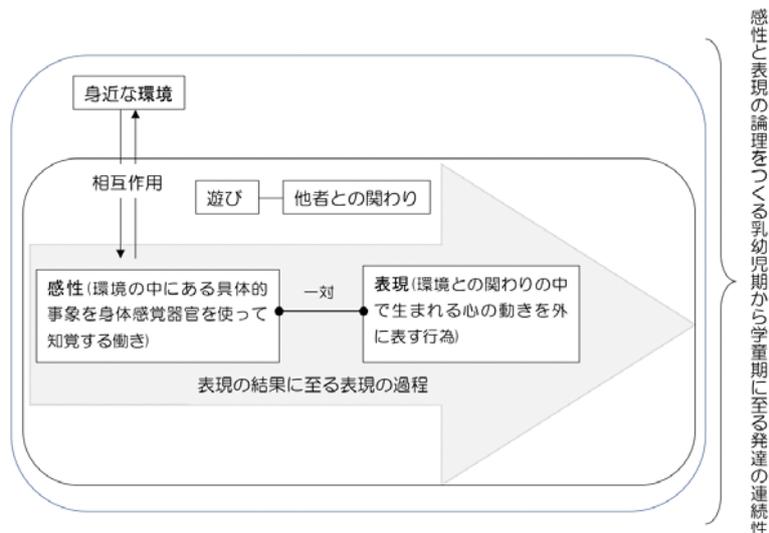


図1 保育内容領域「表現」において幼児の表現活動を捉える基本的枠組

1-2. 保育内容領域「表現」に対応した保育者養成課程での授業デザインの開発

図1に示したような、保育内容領域「表現」において幼児の表現活動を捉える基本的枠組を前提とした場合、大学保育者養成課程における領域「表現」の授業デザインをどのように具体化すればいいのだろうか。例えば、山口（2005）によれば、授業をデザインするとは「教科内容の知識」、「学習者の知識」、「方法の知識」の3つの知識を組み合わせ最適な教育方法と指導の過程を設計することである²⁾。それに従えば、保育者養成課程において領域「表現」の授業をデザインする際には、第一に「教科内容の知識」として、領域「表現」の趣旨と幼児の感性と表現に関する知識、第二に「学習者の知識」として、保育者を志す学生の学びの特性に関する知識、第三に「方法の知識」として、保育者³⁾ 養成課程で学ぶ学生に深い理解をもたらすような教育方法に関する知識、の3つを組み合わせデザインすることが重要になる。先に示した領域「表現」において幼児の表現活動を捉える6つの基本的な枠組は、第一の、教科⁴⁾ 内容を構成する知識に相当する。

筆者は音楽教育を専門分野としていることから、身体、造形、音という代表的な表現媒体のうち音に注目し、先に示した領域「表現」において幼児の表現活動を捉える基本的な枠組を前提に、領域「表現」の授業⁵⁾ デザインの開発に取り組んできた。開発した授業デザインとしては、身近な素材による音遊びの活動を教材化した事例（横山2018）、「音の散歩道づくり」の活動を教材化した事例（横山2019）がある。身近な素材による音遊びや「音の散歩道づくり」の活動事例は、いずれも、保育者養成課程で学ぶ大学生（これ以降、「保育学生」と略称）が保育実践や幼児と表現遊びを楽しむ経験（山口の言う第二の「学習者の知識」）が乏しいことをふまえ、幼児の表現活動を追体験し活動に対する省察（リフレクション）を促すことを通して実践的な学びと理論的な学びが結びつくような、アクティブラーニングによる教育方法（山口の言う第三の「教育方法の知識」）を導入している。それらの授業デザインの開発研究から、保育実践や幼児と表現遊びを楽しむ経験の乏しい保育学生の学びにおいても、幼児の表現活動の追体験を通じた学習経験の省察によって保育者の視点からの気づきが生まれるという示唆が得られている。しかし、保育学生の中には、保育者の視点をもたず自身が遊んだ経験についての感想に終始する者や、領域「表現」において幼児の表現活動を捉える基本的な枠組についての知識を講義によって得たものの、得た知識を追体験した幼児の表現活動と関連付けて考えるに至らない者もいた。つまり、保育実践や幼児と表現遊びを楽しむ経験の乏しい保育学生の学びには、実践知と理論知を関連付ける点で不十分さがあつた。なぜだろうか。保育実践や幼児と表現遊びを楽しむ経験の乏しい保育学生が、実践知と理論知を関連付け幼児の感性と表現の本質に対して深く理解することができるようにするためには、どうすれば良いのだろうか。

以上の問題意識から、筆者は保育実践や幼児と表現遊びを楽しむ経験の豊富な保育者の学びに着目した。領域「表現」における幼児の表現活動についての保育者の学びにはどのような特徴があり、保育実践の経験の浅い保育学生の学びとどのような相違点があるのだろうか。このように保育者の学びの特徴を検討することにより、領域「表現」に対応した保育者養成課程での授業をデザインする上での示唆が得られるのではないかと考えた。

2. 研究の目的と方法

2-1. 目的

以上より本研究では、保育者が「音の散歩道づくり」の学習経験を通してどのようなことに着目してリフレクションを行ったのかという観点から保育者のリフレクションの特徴を明らかにし、領域「表現」に対応した保育者養成課程での授業デザインの開発への示唆を得ることを目的とする。本研究における「学びのリフレクション」とは、過去の保育実践の中で得ている経験知と「音の散歩道づくり」の活動により得た経験知を関連付けて省察したり、それらの経験知を大学授業での講義で得た理論知と関連付けて省察したりすることである、と定義する。この定義に関しては、実践的な経験から出発し実践と理論を往還させながら教育実践に対する省察力と専門性を高めていく教師教育プログラムを提唱しているコルトハーベン(2010)を参照している。

2-2. 分析事例の概要

「音の散歩道づくり」の活動とは、馴染みのある楽器や音の出る素材を、イメージに合うように並べ、その場所を通りながら音色と想像の世界を楽しむことができるように、散歩道を構成する活動である。細田淳子による「音のさんぽ道」(細田2006)を参照し、筆者が領域「表現」に関する大学授業や教員研修で活用できる活動として教材化した。筆者が身近な素材や馴染みのある楽器を並べて音を楽しむ細田の「音のさんぽ道」に着目した理由は、領域「表現」において強調されている身近な環境との関わりの中で感性を働かせ表現する過程が実現できると考えたからである。筆者が教材化した「音の散歩道づくり」は「構成活動」という教育方法の原理に基づいてデザインされており、この点に、細田の「音のさんぽ道」との違いがある(横山2019a)。「構成活動」とは、内的な思考・イメージ・感情の構成と外的な音楽表現の構成が連動する、構成的な音楽活動を指す(横山2019b)。「構成活動」を教育方法の原理とした音楽科授業デザインにおいては、内的な思考・イメージ・感情の構成と外的な音楽表現の構成の連動が重視される。

「音の散歩道づくり」の活動では、身近な素材を使って散歩道のイメージに合う音色を探す過程で感じたり考えたり気付いたりする心の動きが、素材から出る音や擬音語、言葉、身体動作、描画などの媒体を通して表現される。活動主体が幼児であれば、音を鳴らしたり組み合わせたりする「音の散歩道づくり」の活動は、楽しい音遊びとなる。幼児は音遊びの過程で音に対する感性を働かせ、音に気づき音に対するイメージを芽生えさせるだろう。一方、本研究で取り上げた実践事例における活動の主体は、保育者である。保育者にとって「音の散歩道づくり」の活動は、子どもの感性と表現の本質を深く理解するための学びの教材である。したがって、幼児にとって楽しい遊びである「音の散歩道づくり」の活動を保育者自身が追体験し、保育者の視点からその学習経験を省察すること、すなわち学びのリフレクションがなければ、保育者がこの活動に参加する意味は薄れてしまうと考えた。そこで、本実践事例では、保育者による学びのリフレクションを促す手立てとして、次の3つの手だてをとった。

第一の手だては、講義による領域「表現」及び幼児の感性と表現の本質に関する基本的知識の提示である。「音の散歩道づくり」の活動の事前には、プレゼンテーションを実施し、領域「表現」の趣旨や幼児の感性と表現の本質についての知識を活用してリフレクションが行えるように意図した。

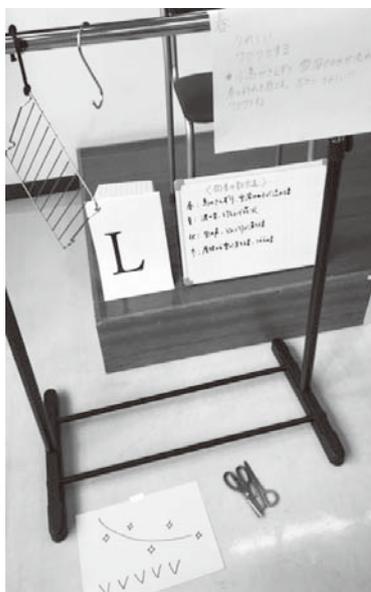
第二の手だては、ワークシート⁶⁾（これ以降、WSと略称）の活用である。「音の散歩道づくり」をグループで製作する最中に自分たちのアイデアを記述したり、製作した「音の散歩道」を実際に体験しながら気付いたことや感じたことを記述したりすることを通して、素材と音色の関係、鳴らし方（奏法）と音色の関係、音色とイメージの関係について気付きが生まれるように意図した。

第三の手だては、アセスメントシートの設問である。活動の事後には、アセスメントシート⁷⁾（これ以降、ASと略称）に記述することにより、自分のグループが取り組んだ「音の散歩道づくり」の製作過程と他のグループが製作した「音の散歩道」を実際に音を鳴らしながら体験する活動について振り返ることができるように意図した。その際、単に活動を振り返りましょうといった漠然とした設問ではなく、「『音の散歩道』をつくる活動と『音の散歩道』の感動を体験する活動を振り返り、保育者の立場から学んだことをまとめてみましょう。その際、平成29年告示幼稚園教育要領の文言を引用しながら、『感性』『音色』『気付き』『伝え合い』『心の動き』『環境』『遊び』などのキーワードを使って記述しましょう」というように、いくつかの視点を提示した設問にした。

「音の散歩道づくり」の活動における学習経験と指導の過程は、表1のとおりである。保育者が製作した「音の散歩道」の参考作品は、資料1のとおりである。

表1 「音の散歩道づくり」の活動における学習経験と指導の過程

学習経験の段階	受講者（保育者）の活動	所要時間
講義	○プレゼンテーションを受講する。	30分
アイデア出し	○グループごとに自宅から持ち寄った音の出る素材について交流しながら、どのような「音の散歩道」がつくれそうか、アイデアを出し合う。	30分
製作活動	○音の出る素材を組み合わせ、話し合って決めたテーマを表現する「音の散歩道」をつくる。 ○掲示物（情景を説明する言葉、楽器の鳴らし方を示す線画）をつくる。	60分
体験	○音を鳴らしながら自分のグループの「音の散歩道」を体験し、気付いたことや感じたことをワークシートに書く。 ○音を鳴らしながら他のグループの「音の散歩道」を体験し、気付いたことや感じたことをワークシート（WS）に書く。	60分
振り返り	○アセスメントシート（AS）に、「音の散歩道づくり」の学習経験を振り返って書く。	30分



資料1 Lグループの保育者が製作した「四季の散歩道」（テーマについては、各グループで相談して決めている）

2-3. 方法

(1) 対象

筆者は、平成30年度岐阜県教員免許状更新講習選択領域の開講科目「幼児の音楽表現」の授業において、「音の散歩道づくり」の活動を実践した。A大学構内において、2018年8月10日に実施した。午前中に講義（90分×2コマ）を行い、午後に「音の散歩道づくり」の活動（90分×2コマ）を行った。

本研究では、その活動の後に受講者である保育者（これ以降、受講者を保育者と表記）が「音の散歩道づくり」の活動の後に記述したAS（資料1）を分析対象資料とした。保育者はAS中の設問に従い、A4用紙2枚（約1200字）を用いて記述した。

(2) 倫理的配慮

研究倫理上の配慮として、講習の最初に保育者全員に対して次の説明を行った。研究の目的は領域「表現」に関わる保育者養成課程での授業デザインの開発の示唆を得ることであること、そのために授業の最後に使用するASの記述内容をデータ化して分析するが、研究目的以外でのデータ使用を行わず、データの使用に際して個人情報や人権の保護に十分留意すること、保育者はデータ使用の同意の可否に関わらず講習後の成績評価について不利益を被らないこと、などである。授業の最後に、データ使用の可否について文書で回答をいただき、81名全員の同意を得た。

ASは免許状更新講習に参加した保育者の学びの成果であり、筆者による成績評価の基本資料として位置付けられていた。そこで、研究によって成績評価に影響が及ぶことのないように、成績評価が確定しその結果が覆される恐れがない時期（免許状更新講習実施の約半年後）より、ASの分析を開始した。

(3) 分析方法

自由記述文を分析する場合、自由記述の内容を質的に解釈することによって知見を得ようとする、分析者の恣意性は免れず分析者が個人的な見解を述べるに留まってしまう危険性がある（須田2017）。かといって、統計処理によって量的に分析可能なデータを作成すると、個々の保育者が何をどのように学んだのかといったリフレクションの跡が生き生きと記述されている文脈から、統計処理されたデータが離れてしまう危険性がある。

以上のような分析方法上の問題を考慮し、本研究では、保育者のリフレクションの傾向を量的データとして把握しつつ、量的データを個々の保育者のリフレクションの文脈と関連付けて解釈する方法を採ることとした。本研究において工夫したこのような分析方法を、仮に「量的データと質的な解釈を関連付けた分析」と呼ぶ。「量的データと質的な解釈を関連付けた分析」を行うために、曖昧な状況や自由記述文を対象とした分析における問題解決の手法の一つとして、松井啓之が紹介しているKJ法（松井2007）および今尚之が紹介しているKW分類法（今1995）を参照した。以下、81人の自由記述文の内容を量的なデータに変換する手続きを示す。

- ① 81人分のASに記載された自由記述文について、保育者は主に何について記述しているかという観点から内容のまとまりを捉え、379枚のラベルに分割転記した。恣意的にならないように、記述文の省略を控え可能な限り忠実に転記した（1ラベルにつき1～2文）。この段階で、379ラベルのデータは匿名化される。
- ② 379枚のラベルについて、保育者は主に何について記述しているかという観点から記述内容を検討し、保育者の働きかけ、幼児の活動、「音の散歩道づくり」の体験、保育活動に対する反省（評価）、理論知の活用、の5つにグループ化した。1つのラベルは、1つのグループにしか属さないものもあれば複数のグループに属するものもある。
- ③ ②で分類した5つのグループのうち、保育者の働きかけ、幼児の活動、「音の散歩道づくり」の体験、

保育活動に対する反省（評価）の4つのグループについて、保育者は何に注目して学習経験を振り返っているかという観点から記述内容を検討し、9つのキーワード（音への気付き、遊び、音に対するイメージの芽生え、環境構成・身近な環境、伝え合い、活動の楽しさ、興味・意欲、音に対する直接経験、他のグループがつくった「音の散歩道」の体験）を抽出した。1つのラベルは、1つのキーワードを含むものもあれば複数のキーワードを含むものもある。

- ④ ③で分類した4つのグループの各々について、②で抽出した9つのキーワードがどの程度記述内容に含まれているかカウントして、量的なデータを作成した。
- ⑤ ②で分類した5つのグループのうち、理論知を活用した記述のグループについて、保育者は何に注目して学習経験を振り返っているかという観点から記述内容を検討し、7つのキーワード（身近な環境、身の回りの自然、心の動き・心を動かす経験、音や他者との出会いと対話による協働の学び、音の出るものから楽器への変身、表現とは心の扉を開くこと・生きる証、行為と結果の関係への気付き、イメージの芽生え）を抽出した。
- ⑥ 理論知を活用した記述のグループについて、⑤で抽出した7つのキーワードがどの程度記述内容に含まれているかカウントして、量的なデータを作成した。

以上に示した手続きによって、得られた量的なデータと典型的な自由記述文を関連付けながら解釈した。

3. 分析結果

各グループの分析結果を以下に示す。記述の典型例に添付した（M4）などの符号は、個々の記述者を意味する。

3-1. 保育者の働きかけに着目した記述のグループ

保育者の働きかけの重要性に着目した記述の割合は、全ラベル数の45%である（図2）。保育者が特に重要と考えているキーワードは、「環境構成」である（図3）。物的な環境を整えるだけでなく、保育者自身を環境の一部として捉え環境を構成する保育者の幼児への関わり方を重視している点が特徴的である。記述の典型例として、「子どもたちと一緒にいろんな用具・素材を集めたり、一緒に探してみる環境を作ったり」（M4）、「環境といっても遊具や教具を与えることだけではなく、子どもたちの小さな心の動きに気付きそれを認めてあげられる『心の環境』を整えなければならない」（L5）、「子ども達に気づかせてあげないとただの物で終わってしまうので、保育者自身が一つの環境として子ども達に伝えていくことが大切」（C4）がある。

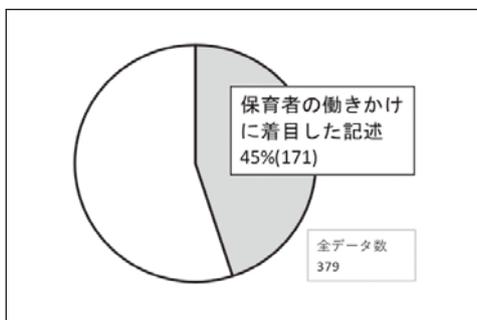


図2 保育者の働きかけに着目した記述の割合

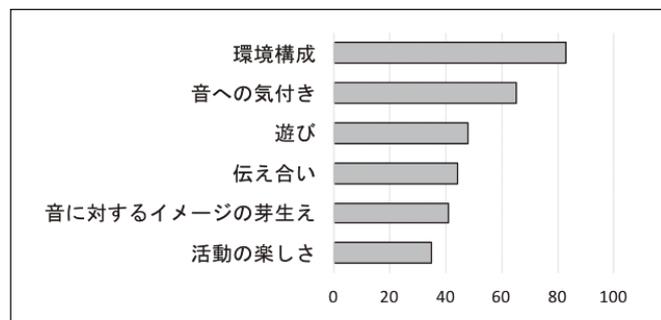


図3 保育者の働きかけに着目した記述のキーワードによる分類

3-2. 幼児の活動に着目した記述のグループ

幼児の活動に着目した記述の割合は、全ラベル数の38%である（図4）。保育者が幼児の活動において最も重要と考えているキーワードは「音への気付き」であり、続いて「音に対するイメージの芽生え」である（図5）。生活の中にある身近な素材を持ち寄り音を鳴らす活動によって、保育者は音に気付き、多様な音が多様な心の動きを生み出すことに気付きそのことに感動している。さらに、保育場面での幼児の様子を思い出し、音を鳴らす子どもの行為を改めて捉え直している。

記述の典型例として、「1歳児が手作りおもちゃの『ぽっとん落とし』にはまっている。ただ「ポトン」という音だが、保育者の語りかけが『雨の音みたい』と言えば、子どもたちはその音色を聞いて雨を思い出したり、外を指さしたり、遊びのなかの学びにつながっていると感じた。保育者が作った音の散歩道と一緒にやってみると、きっと音色に耳を傾け、心地よいと感じたり、ワクワクしたり、うるさいと感じたり、それぞれの感性を引き出す環境となるのではないか。ぜひやってみよう」（K6）、「子ども達とゆったりとした気持ちで散歩に出かけ、稲の揺れる音、サツマイモのつるが伸び合っている音、野菜を収穫するときの音、風の音、カエルがはねる音などに耳を傾け、土地柄を生かした散歩道をつくりたい」（L3）がある。

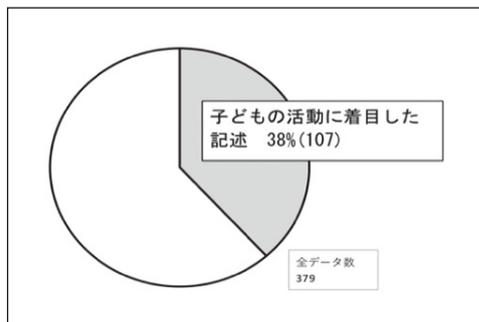


図4 幼児の活動に着目した記述の割合

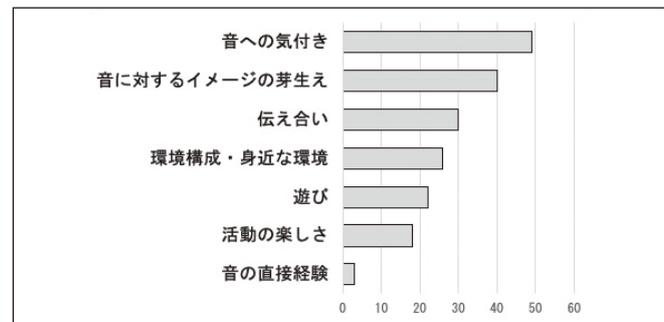


図5 幼児の活動に着目した記述のキーワードによる分類

3-3. 「音の散歩道づくり」の経験に着目した記述のグループ

「音の散歩道づくり」の経験に着目した記述の割合は、全ラベル数の41%である（図6）。「音の散歩道づくり」の経験において特に重要と考えているキーワードは、音への気付き、音に対するイメージの芽生え、伝え合いである（図7）。数人のグループ活動の中では、様々な素材から様々な鳴らし方により様々な音が生まれる。それらの音の感じを「〇〇の感じがする」「〇〇の気持ちになる」と伝え合うことにより、保育者は音に対する感じ方、感性の多様性に気付き、音に対するイメージを伝え合い共感することに意味を見出している。

記述の典型例として、「持ち寄った様々な物を用いて、話し合いながら音を作り想像することが楽しかった。様々な物の組み合わせから生まれる音の発見は楽しかった」（E5）、「その音が『〇〇のようだ』と気付くことも楽しめたが、その気付きを同じグループのメンバー同士で伝え合い共感し合うことで、共通のイメージを持ち、仲間と感動したり楽しんだりするという面白さも学ぶことができた」（L1）、「グループ活動の中で、いろいろな素材の音色に気付き、その音から何を思い浮かべるだろう・・・と伝え合うことで、身近にある物がこんなにも楽しい活動、遊びにつながる」（D3）がある。

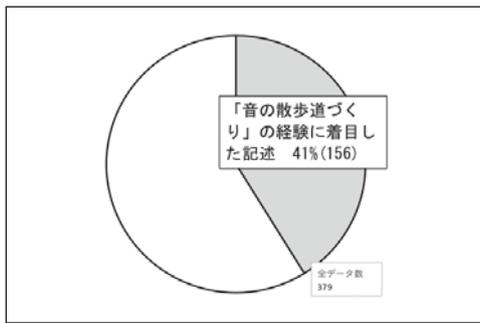


図6 「音の散歩道づくり」の経験に着目した記述の割合

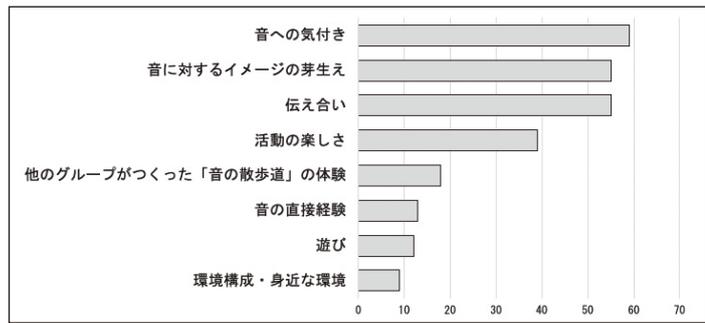


図7 「音の散歩道づくり」の経験に着目した記述のキーワードによる分類

3-4. 保育活動に対する反省（評価）を記述しているグループ

保育活動を反省（評価）している記述の割合は、全ラベル数の14%である（図8）。どのようなキーワードによって保育活動を反省（評価）しているか調べると、最も多かったのが、音への気付きである（図9）。保育者は、既存の楽器や曲を渡して演奏させるといった従来の音楽活動を反省し、幼児は日常生活の中で音に気付き遊びの中で感性を育てていることを再発見している。

記述の典型例として、「楽器だけが楽器ではなく、身近な生活用品だったり自然物だったり、自分の周辺にある物全てが音を楽しむ素材であると改めて感じた」（D6）、「私が受けた音楽教育は初めから楽譜があり、楽器があるものだった。この形式ばったものが音楽だと決めつけるのではなく、自然環境の中から音に気付いたり、遊びの中から音を発見したりする子どもの感性を大切にしなければならない」（E1）、「身近な環境の中から音、楽器を見つけるという遊びを通して、鈴や太鼓だけが楽器ではないと知り、柔軟な感性で様々な音色の美しさ、楽しさを感じていける保育をしていきたいと思った。楽器を渡して演奏するといったものばかりにならないようにしたい」（E3）がある。

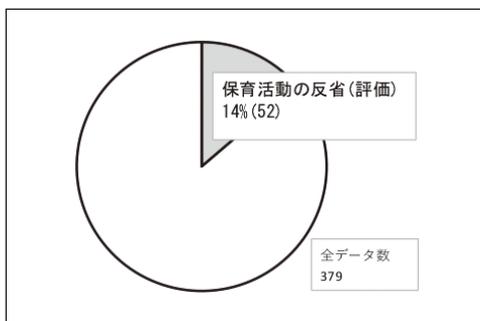


図8 保育活動に対する反省（評価）の記述の割合

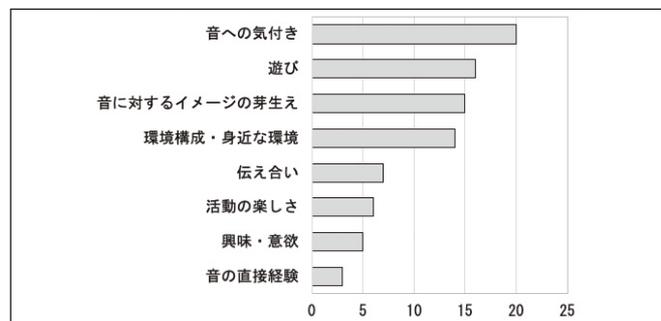


図9 保育活動に対する反省（評価）の記述のキーワードによる分類

3-5. 理論知を引用した記述のグループ

ここで言う「理論知を引用した記述」とは、講義の中で筆者が紹介した文献や資料（平成29年告示幼稚園教育要領、郡司すみ著『世界楽器入門』、「構成活動」の理論）の内容を引用しながら学びを振り返っている記述を指す。

理論知を引用した記述の割合は、全ラベル数の21%である（図10）。どのような内容に着目して文献や資料を引用しているのか調べると、多かったのが、身近な環境、身の回りの自然、心の動き・心を動かす経験、音、他者との出会いと対話（協働の学び）である（図11）。

記述の典型例として、「色々な音との出会いが気付きやイメージの芽生えになる。そんな出会いと対話する環境は遊びの中で生まれてくると思った。その遊びは、自然の中にある音、色、形などがあると気付

いた」(M3)、「身近な環境の中で風の音や雨の音、草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気づき、考えたことを自分なりに表現する。伝え合い共有していくと遊びがどんどん広がっていき、表現する楽しさも味わっていただけるのだと思った」(A5)、「遊びの中からひとつの音に気づき意識し始めることで楽器となっていく。遊びの中から楽器に変わる瞬間、心の動きを感じて子どもたちにも伝えていき、音の世界を広げていけたらいいなと思った」(K4)、「『表現は子どもの生きた証』といわれたことが、とても強く印象に残った。自分の内なる世界をどんな形でもいいので外の世界に出すことができるということが大切であり、存在として子ども自身も自己の認識につながっていくことを感じた」(G3)がある。

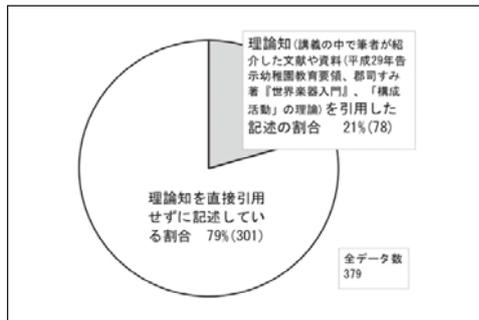


図10 理論知を引用した記述の割合

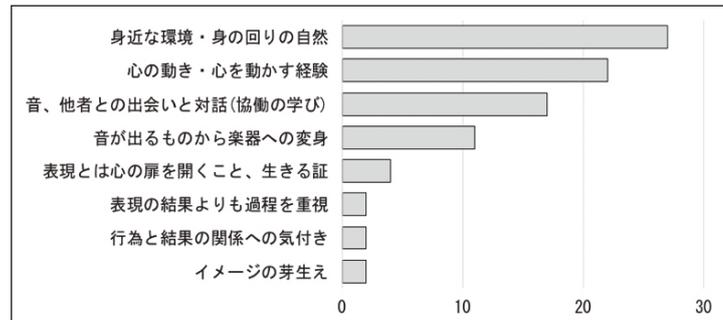


図11 理論知を引用した記述のキーワードによる分類

4. 結論

本研究は、保育者が「音の散歩道づくり」の学習経験を通してどのようなことに着目してリフレクションを行ったのかという観点から保育者のリフレクションの特徴を明らかにし、領域「表現」に対応した保育者養成課程での授業デザインの開発への示唆を得ることを目的としていた。そのために、「量的データと関連付けた質的な解釈による分析」の方法によって、教員免許状更新講習選択領域の開講科目「幼児の音楽表現」の授業における「音の散歩道づくり」の活動に参加した保育者のアセスメントシート(AS)の記述を分析した。

以下、分析結果に基づき結論を述べる。

4-1. 「音の散歩道づくり」の学習経験における保育者のリフレクションの特徴

「音の散歩道づくり」の学習経験における保育者の学びのリフレクションの特徴として、以下の三点を見出した。

(1) 物的・心理的な環境を構成する保育者の役割

第一に、保育者は物的な環境を整えるだけでなく、保育者の子どもへの関わり方も環境を構成する重要な要因であり、保育者自身を環境を構成する重要な要因として捉え直していた点に、保育者のリフレクションの特徴があった。おそらく、保育者は身近な環境との相互作用を通して子どもの感性と表現が育まれるという講義から得た知識に触発され、物的・心理的な環境を構成する保育者の役割を再認識したのではないかと推察する。とりわけ特筆すべきは、幼児に働きかける保育者の存在は子どもの感性と表現を育む環境を構成する重要な要因なのだという気づきが生まれていた点である。このような気づきは横山(2019)で分析した保育実践の経験の浅い保育学生の学びにはなかったことであり、日頃の保育実践の中で幼児と密に関わり合っている保育者ならではの気づきであったと言える。

(2) 理論知と「音の散歩道づくり」の経験知の関連付け

第二に、講義を通して得た理論的な知識（理論知）を「音の散歩道」をつくる活動の中で得た経験的な知識（経験知）と関連付けて振り返っていた点に、保育者のリフレクションの特徴があった。

3-1で分析したように、保育者は幼児が遊びの中で音に気付くように環境を構成する必要がある点に、保育者の働きかけにおいて重要と考える観点を見出していた。「身近な環境との相互作用を通して音への気付きが生まれる」という視点は、筆者の講義における強調点の一つであった。講義によって得たこのような知識を「音の散歩道づくり」の経験と重ねることにより、保育者は音が出る身近な素材に保育者自身が注意を向けたり、幼児が遊びの中で音に気付くことができるような環境を整えたりすることが、幼児の感性と表現を育てる上で重要なのだと意味付けていたと推察される。

また、3-2で分析したように、保育者は「音の散歩道づくり」の活動を振り返り、遊びの中で音に気付き、音色に対するイメージが芽生え、イメージを伝え合うことによって共感が生まれることに意味を見出していた。「遊びの中での音との出会い、音色に対するイメージの多様性、イメージの伝え合いによる他者との出会い」という視点は、筆者の講義における強調点の一つであった。したがって、保育者自身が楽しみながら音の散歩道をつくったり味わったりする経験を通して、言い換えれば幼児の遊びとしての「音の散歩道づくり」を追体験することを通して、実感を伴った理論的な知識の理解が得られたのではないかと推察される。

3-5の分析データを見ると、講義の中で紹介された文献や資料を引用しながら記述していた保育者の割合は決して高くないのであるが、以上に考察したように、保育者は幼児の遊びの追体験ともなる「音の散歩道づくり」の学習経験を通して、理論知と「音の散歩道づくり」の経験知を関連付けながらリフレクションを行なったと言える。

(3) 保育実践の中での音楽活動に対する反省

第三に、「音の散歩道づくり」の学習経験の振り返りを通して保育実践の中での音楽活動に対する反省が促されていた点に、保育者のリフレクションの特徴があった。

3-4で分析したように、音への気付き、遊び、音に対するイメージの芽生え、環境構成・身近な環境をキーワードに日頃の保育実践の中での音楽活動を反省していた点に、保育者のリフレクションの特徴があった。保育者は、生活の中にある身近な素材を持ち寄って音を鳴らす活動の中で音に気付き、多様な音が多様な心の動きを生み出すことに気付き、そのことに感動していた。そして、既存の楽器や曲を渡して演奏させるといった従来の音楽活動⁸⁾を反省し、幼児は日常生活の中で音に気付き遊びの中で感性を育てていることを再発見している。仮に、保育者が「音の散歩道づくり」のように自発性や創造性を重視した音楽活動ではなく、既存の音楽を演奏する音楽活動を経験したならば、このような反省は出てこなかったかも知れない。この点においても、横山（2019）で分析した保育学生の学びにはなかったことであり、日頃の保育実践の中で音楽活動を行なっている保育者ならではの気付きであったと言える。

4-2. 領域「表現」に対応した保育者養成課程での授業デザインの開発への示唆

以上、「音の散歩道づくり」の学習経験における保育者の学びのリフレクションの特徴として、(1) 物的・心理的な環境を構成する保育者の役割、(2) 理論知と「音の散歩道づくり」の経験知の関連付け、(3) 保育実践の中での音楽活動に対する反省、の3点を見出した。このことから、領域「表現」に対応した保育者養成課程での授業デザインの開発に関して、次のような示唆が得られる。

理論（領域「表現」の趣旨や幼児の感性と表現の本質的理解をもたらす学問的知識）と幼児の音楽活動の追体験を往還させながら深い学びが得られるように、授業をデザインすることが重要である。そのためには、領域「表現」の趣旨と幼児の感性と表現の本質に迫ることができる活動的な教材を開発することが必要になってくる。

5. 今後の課題

本研究に関わる今後の課題は、以下のとおりである。

第一に、本研究において示した分析データの母数は限られた人数であることから、同様の実践と分析資料を数多く収集して分析し、本研究の知見を再検討し知見を再構成することによって知見の蓋然性を高めていくという課題がある。

第二に、「音の散歩道づくり」のを教材とした授業実践を積み重ね、授業デザインを洗練させていくという課題がある。

註

- 1) 本稿では、ここでの感性と表現の概念の定義を、横山（2019a）を参照して行なっている。
- 2) 山口栄一（2005）「第1章 デザインとインストラクション」『授業のデザイン』玉川大学出版部，pp. 13-30を参照。
- 3) 本稿で言う保育者とは、制度上規定されている幼稚園教諭免許や保育士資格を取得した者の総称を指す。「保育者」の定義に関しては、次の論考を参考にした。田村滋男（2013）「『保育者』と『保育士』について」永原学園・西九州大学短期大学部紀要第44号別冊，pp. 1-10
- 4) ここでの「教科」とは小学校以降の教科である音楽科を指すのではなく、保育者養成課程での大学授業科目を指す。
- 5) 保育者養成課程において保育士資格・幼稚園教諭免許に関わる必修科目として位置づけられている、保育内容領域「表現」に対応する授業科目を指す。
- 6) ワークシートとは、「学習者が、授業中の活動の前後あるいは最中に、授業者からの問いに対して自分が考えたことや感じたこと気付いたこと等を記述する質問紙」（横山2017）を指す。
- 7) アセスメントシートとは、「授業者が、目標に照らして学習の達成状況を価値判断することを目的として、個々の学習者の学習状況を確認する質問紙」（横山2017）を指す。
- 8) 立本（2008）では保育現場における主要な音楽活動は、ピアノなどを用いて子どもの歌を歌う活動であることが明らかにされている。これも、保育者が指摘する、既存の曲を渡して演奏させる音楽活動の例である。

引用・参考文献

- 細田淳子（2006）「音のさんぽ道」『わくわく音遊びでかんたん発表会』すずき出版，p. 26
- 今尚之（1995）「KW分類法を用いた自由記述文データベースによる意識分析手法」土木システム論文集 Vol4, pp. 1-8
- コルトハーヘン，F.（2010）武田信子他訳『教師教育学：理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社。
- 松井啓之（2007）「システムの解析と設計 発想法」計測と制御第46巻第4号，pp. 292-297
- 民秋言（2008）「図表2 教育・保育内容の『領域』の変遷」民秋言編『幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷』萌文書林，p.7
- 須田昂宏（2017）「リアクションペーパーの記述内容に基づく学生の学びの可視化—大学授業の実態把握のために—」日本教育工学会論文誌41（1），13-28
- 立本千寿子（2008）「保育現場における音楽実践と新傾向の現状」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校

音楽教育研究』12巻, pp. 128-129

山口栄一 (2005) 「第1章 デザインとインストラクション」『授業のデザイン』玉川大学出版部

横山真理 (2017) 「アセスメントシート」日本学校音楽教育実践学会編『音楽教育実践学事典』音楽之友社, p. 82

横山真理 (2017) 「ワークシート」同上書, p. 82

横山真理 (2018) 「保育内容の指導法『表現』の授業における学生の気づきを促す学習環境の構成要素—身近な素材による音遊びの授業実践記録の分析を通して—」東海学院大学研究年報第3号, pp. 49-59

横山真理 (2019a) 「保育内容領域『表現』の授業における学生の気づきを促す『音の散歩道づくり』の教材性」東海学院大学研究年報第4号, pp. 53-64

横山真理 (2019b) 「『構成活動』を原理とした音楽科授業におけるイメージの発生過程の解明」名古屋大学博士学位論文

追記.

本稿は、日本保育学会第72回大会（2019年5月5日）での口頭発表「『音の散歩道づくり』の学習経験における保育者のリフレクション教員免許状更新講習の開講科目「幼児の音楽表現」の実践分析-」をふまえ、研究内容を加筆・修正した。

本稿は、東海学園大学研究倫理委員会の審査を経て執筆した（承認番号2019-18）。